

の専横は、受動態・中動態の抑圧と裏腹で、そこには動作主の主体性優先と当事者責任とを前提とする特定の価値観が貫徹されている。

これが数値化による効率化を善と為す社会的良識とも相乗し、A I 脳支配社会の進展に迎合し、V R 仮想現実には洗脳された価値観の醸成にまで加担している趨勢も、無視できまい。

さらに、追試による再現可能性の検証を必須とする自然科学の規律は、反復や循環を嫌う進歩史観と不思議な野合を遂げ、結果として、歴史学、即ち不可逆な一回性の複雑系をなす時空の変貌過程の追認を試みる学術を、科学の埒外に放逐しようとする。J.F. ショープの論説（前出）は、この疎外の齎す危機への憂慮だった、とも解釈できようか。

A I 機器の O S 基盤の均質化・寡占化による「合理性」は全球化 Globalization と手を携え、文化多様性のみならず生物多様性をも農耕牧畜の monoculture 化によって駆逐しつつある。それは中尾悠里の述べる「技術の他者化」、包含の述べる「私たちの脱個性化」というよりは、夙に P. スローターダイクが認めた、ヒトの家畜化、否、自業自得の「自己奴隷化」に他なるまい。

以上、U. エーコらと「原住民の科学」相互の異文化交差点衝突実験で「比較」ならぬものの「比較」の臨界を闊てきた評者の、濃縮過剰、舌足らずな読後感。（了）

す「無意識のフィルタ」からも自由ではない。そう確認したうえで、情報科学者の包含は、三中の論じた分類操作の根拠に踏み込む。

●群と▲群とを最小の誤謬で裁断・分別する操作が分類の「最適化」だが、そもそもその●と▲の区別基準は誰が付けたのか。ここには既に元データと分類結果との循環論法が露呈する。

さらに不純物が紛れ込めば、測定結果は無効になる。小惑星リュウグウからの採取鉱物に、地球の酸素や水、粉塵が混入すれば発生する「事故」だが、ここには別種の論点先取が潜む。

即ち理想状態の実験室には、自らの有効性を握り崩す要因を進んで排除する性向があり、有効なデータには、理論枠の正しさを補強する性質がある。これは社会科学の統計調査の環境設定では定番で、それを意図的に悪用した恣意的なデータ操作や、敵対的攻撃も日常茶飯に観察される。

包含の論考はこうした危険が A I 機器への依存によりさらに悪化する恐れを警告する一方で「特定の言語モデル」には「アングロ・サクソン中心的な価値観が強く反映されている」とも注記する。評者按ずるに、現代の英米語論文では、主語不明の受け身表現は忌避され、日本語特有の視点・時制の自在な移動には、三段論法・因果律無視の論理性欠如との烙印が押される。

固定視点の厳密な設定は、淵源を辿ればアリストテレス論理学の無矛盾律・排中律に遡る。また能動態

連載
259

学術の基礎を問い直す

（下）「比較」の臨界と「再現実験」の陥穽

小俣フボー日登美編著「事実」の交差点——科学的対話が生まれる文脈を探して——
ナカニシヤ出版を読む

国際日本文化研究センター／
総合研究大学院大学・名誉教授
稲賀繁美

（承前）現象学と言う noema と noesis の志向性の交差点に熊楠の「コト」が析出する。そのノエマの側にデータを指定するなら、それはまだ「事実」の資格獲得以前の現象だろう。またデータには数値化が必要となれば、特定の座標軸設定が不可欠となる。だが座標の特定は必然的にそれ以外の検出基準を除外する。直行する xy 座標軸に垂直な z 軸上の値は、xy 軸平面からは不可視の欠落となる。同様の操作上の盲点が、類似性の指摘一般には、情報化以前の前提として伏在する。

数値化は観察基準の削減あるいは貧困化と表裏をなし、反対に座標限定では扱いきれぬ現象は複雑系と呼ばれる。樹状モデルの基礎をなす地下の根茎は菌類などと複雑な錯綜した共生関係を結び、草木も不可視の回路で情報を交換している。

惑星物質科学者の松本徹は、生物（複雑系）と無生物（物理法則）との断限に抵抗した寺田寅彦の文章を引く。評者按ずるに、寅彦没後の分子生物学は、生命とは何か、の解明を放棄した。自己増殖機能は条件が揃えば鉱物結晶も発揮する。自己複製には遺伝子は必須ではなく、ウィルスは生物と無生物との罅を行き来する。さらに太陽系の内部でも、熱力学第二法則を局所的に裏切る「生態系」を準備する公転軌道と水循環の動的平衡を備えた惑星は、地球のみに限定される。

所詮、ヒトがなす自然観察は、地球生態系に立脚し、人類の認識能力の前提をな